

石川新二 アメリカでの足跡

細田 樹里

はじめに～石川の画歴・本稿の目的

石川新二（新一・華香、1903-81）ⁱ は、現在の田原市に生まれ、東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）で永地秀太、和田香苗に学び、小倉の陶器会社勤務を経て女学校の教諭へと転じた。奈良、鹿児島に赴任した後愛知に戻り、1936年に豊橋市立高等女学校（現・愛知県立豊橋東高等学校）教諭となり、鹿児島時代より出品していた日本水彩展への出品を続け、1942年に会員に推挙されている。豊橋東高等学校を1949年に退職後は、画塾「双葉会」を開いて子どもたちに水彩を教えながら制作活動を続け、個展「第1回豊橋百景展覧会」（1952年 豊橋・浦柴屋画廊）、「第2回豊橋百景展覧会」（1953年 豊橋市公会堂）を開催。作品を見た進駐軍の記者にアメリカ水彩協会（The American Watercolor Society）への出品を勧められ、1952年の初出品から2年続けて入選を果たすと、1954年3月に渡米している。ⁱⁱ

以後、滞米期間は20年を超える長きにわたり、現地の美術団体会員となり、作品発表の場としたほか、ニューヨークやフロリダで個展を開催し、大学や美術館、個展会場において席画を披露している。^{iv} 当時の日本国内の人々にとっては、一時帰国（1961,1962,1964,1973,1976）した際の個展が石川の作品を見る主たる機会となり、ごく限定的であった。郷里に近く、1936年から活動拠点とした豊橋での個展「世界スケッチの旅 其の一、其の二」（1963～64年 豊橋市公会堂）、長女の居住地である川崎（1974年 川崎市産業文化会館）、横浜（1976年 神奈川県民ホール）での個展などが挙げられる。アメリカでの生活を切り上げ、永住のため1978年に帰国して郷里にアトリエ「聴涛庵」を構え、再度国内を拠点に作品発表をはじめた途上、不慮の事故により1981年に亡くなった。このような事情により、滞米時代の詳細について石川が語る機会は突然失われた。また、没後40年以上の経過した現在、米国での活動について断片的な情報が分かるのみで、不明な点も多い。本稿では、滞米中の石川の活動について、当時のアメリカ画壇・交友関係を交え、紹介する。

石川が渡米した1954年にアメリカ水彩協会の会長職にあったのは、フレデリック・ウィテカー（Frederic Whitaker, 1891-1980）である。ウィテカーが会長職にあったのは1949～56年で^{vi}、日本から出品した1952年の初入選、1954年の渡米、1956年の会員推挙と、滞米前～初期と重なっている。ウィテカーは、同協会会長を務めるより前の1943年に、オーデュボン美術協会という別の美術団体を設立し、後に会長を務めている。画家で鳥類研究家ジョン・ジェームズ・オーデュボン（John James Audubon, 1785-1851）にちなんだ名称がつけられているが、絵画・版画・彫刻によるあらゆる主題を扱う作家が所属し、展覧会を行う団体であり、石川も1955年に同協会会員となっている。そこには、ウィテカーや、後述するマリオ・クーパーの影響があったことを推測する。^{vii}

滞米直後の活動に特に大きな影響を与えたのが、マリオ・クーパー（Mario Cooper, 1905-95）である。アメリカ人の父、メキシコ人の母を持ち、長男としてメキシコ市に生まれたクーパーは、幼少期に両親が離婚後、父親や弟妹とアメリカへ移住している。当初は商業広告の分野で実績を積み、後に彫刻と絵画を手がけるようになり、作品発表を行う一方、コロンビア大学やアート・ステューデンツ・リーグ、プラット・アート・インスティテュート等で後進を育て、さらには自身の所属する美術団体の要職を務めるなど、多方面で活躍した。^{viii} 日本文化に対する造詣が深く、自宅に日本庭園を拵え、日本の版画を飾り、俳句も暗誦できた。また、1954、56、57年の3度、アメリカ空軍のアート・プログラムでアジアを訪れ、日本では京都、北海道、東京、広島、沖縄を訪れてい

る^{ix}。来日に際しては、石川との意見交換があったことも予想されよう。石川とクーパーとの出会いは、双方にとって幸運であったと思われる。石川が残した書簡に「1954年の渡米と同時に現アメリカ水彩協会長のマリオ・クーパー氏に水墨画を教えソノ時よりスミエといふ言葉を用いるようになり現在アメリカでスミエの大流行の因を作りソレが現今日本に逆輸入となり大流行、笑止の至りなり」とある。渡米直後に「スミエ」を通して作家や美術関係者とのつながりを持てたことは、地縁のないアメリカでの活動を後押しする大きな力となったことであろう。

両者の良好な関係を示す写真がある(図版1)。1966年にメトロポリタン美術館で開催された「アメリカ水彩画の200年—アメリカ水彩協会100年記念展」^x会場にて、石川の作品 *Tree Wave* の前で肩を組む様子を捉えた一枚である。この展覧会は、同協会長の職にあったクーパーが、メトロポリタン美術館のアメリカ絵画ならび彫刻部門キュレーターのロバート・ビバリー・ヘイル (Robert Beverly Hale, 1901-85) と協働して実現させたもので、アート・ステューデント・リーグの美術解剖学講師でもあったヘイルは、クーパーとは同僚であり、その縁により開催に至った。

米國百景をテーマとした川崎市での個展開催に合わせ、石川は1974年に『華香美術 第一巻 米國百景画集』^{xi}を発行している。巻末には次巻以降の予告があり、『第二巻 中南米百景 (次回刊行予定)』『第三巻 南米百景』『第四巻 オーストラリア百景』『第五巻 ヨーロッパ百景』『第六巻 アフリカ百景』『第七巻 東南アジア百景』『第八巻 中國百景』『第九巻 ソ連百景』『第十巻 東日本百景』『第十一巻 西日本百景』『第十二巻 人物動物花鳥』と、全十二巻からなる壮大な計画であった^{xii}。日本永住を視野に入れ、これまでの画業の集大成とすべく予定したものと思われる。しかしながら前述した通り、予期せぬ逝去により第一巻で止まってしまった。同書には、アメリカ国内で石川の作品を所蔵する個人や団体名の記載があり、滞米期の作品の行方を知る上で重要な情報となるため、下記に列挙する。各所蔵家・団体の英文表記のみ記載されているため、発行時より名称が変更されたり統合・廃止されたりして判明しない団体もあるが、可能な限り特定を試みた。

○個人所蔵家 (生年順に並びかえた)

- ・富田幸次郎 (1890-1976) : ポストン美術館アジア部長 (1931-63)^{xiii}
- ・パール・バック (Pearl Buck, 1892-1973) : 小説家、1938年ノーベル文学賞受賞
- ・ノーマン・ケント (Norman Kent, 1903-72) : 木版画家
- ・ハーバート・ハーブ・オルソン (Herbert Herb Olson, 1905-73) : 水彩画家^{xiv}
- ・アーチ・オーボラー (Arch Oboler, 1909-87) : 作家・脚本家・エッセイスト、映画監督・プロデューサー
- ・エレン・マクラスキー (Ellen McClusky, 1914-84) : インテリアデザイナー

○美術館・大学等

- ・Holyoke Museum Massachusetts : 不明
- ・Edward Dean Museum : 1958年開館の The Edward-Dean Museum & Gardens (カリフォルニア州) であると推定される。
- ・La Salle College : ラ・サール大学 (La Salle University フィラデルフィア) か。La Salle College は同大学の旧名称である。
- ・Philadelphia College : 不明
- ・Seattle, Washington Museum : 不明。スミソニアン博物館群に属する館か。
- ・New Rochelle College New York : The College of New Rochelle か。同大学は2019年に Mercy College に吸収されている。

- ・ Wisconsin State University：現・ウィスコンシン大学（University of Wisconsin）か。
- ・ Prentice Hall New Jersey：プレントイス・ホール社。教科書を制作および出版する会社。2019年に Savvas Learning に吸収されている。
- ・ Northwest Airlines：ノースウエスト航空。2010年にデルタ航空と経営統合。

結びにかえて

日本人のアメリカへの移住を禁じた1924年移民法は1952年に廃止されてはいたものの、1954年当時、日本人が画家として渡米することは容易ではなく、石川も商社員として渡米している^{xv}。アメリカでの活動がこれほど長期間となることを自身も想定していなかったようで、「3ヵ月もいたらブラジルに行くつもりだったが、いつの間にか23年にもなってしまった。それだけ、アメリカは実力があれば認めてくれるし、活動の場も与えられる」と語っている^{xvi}。これまで見てきたように、石川は渡米の翌年には現地の美術団体の会員となり、次々と活動拠点を広げ、所蔵家にも恵まれた。今後は、前述の1974年当時の情報を基に、滞米期の作品の所在を調査するとともに、1966年のメトロポリタン美術館での展覧会図録にあたり、石川の *Tree Wave* はじめ、交流した同時代作家について調査を進めたい。

（豊橋市美術博物館学芸員）

- i 石川は「新一、新二、華香」を名乗っている。滞米期の大半は「新二」名義のため、本稿においても新二の名を使用する。
- ii 1973年4月28日 朝日新聞。1985年に豊橋市美術博物館で開催した石川華香展図録年譜には1955年3月渡米とあるが、前述の朝日新聞記事はじめ、『米國百景画集 石川華香』（日本華香会 和好堂、1974年）、石川自筆書簡、日本水彩画会に提出された「会員会友画歴」は1954年となっているため、本稿においても1954年3月を渡米時期とする。
- iii 1955年オーデュボン美術協会（Audubon Artists, Inc）会員、1956年アメリカ水彩協会（The American Watercolor Society）、アライド・アーティスト・オブ・アメリカ（Allied Artists of America）会員、1958年ニッカーボッカー美術協会（Knickerbocker Arts Society）会員、1959年ナショナル・カゼイン協会（National Casein Society）会員、1973年サンバーナディノ美術協会（San Bernardino Art Association カリフォルニア州）会員、時期不詳：シルバーマインギルド美術協会（Silvermine Guild of Artists コネチカット州）、ペインターアンドスクラプター美術協会（ニュージャージー州）会員。『米國百景画集 石川華香』（日本華香会 和好堂、1974年）参照。カタカナ表記から英語表記を推定。
- iv 個展：1957年マイアミビーチ・アートセンター、1965年鳳凰堂（ニューヨーク市グリニッジアベニュー）、水墨の席画：1957年マイアミ大学、1961年ニュージャージー州ジャージー市美術館、1965年鳳凰堂。『米國百景画集 石川華香』（日本華香会 和好堂、1974年）参照。
- v 当館では、石川の作品16点を収蔵している。そのうち、滞米期に制作されたのは下記6点である。1.《こおろぎ》（1959）：マイアミビーチ・アートセンター個展（図版2）、2.《九龍風景》（1963）、3.《古い建物（教会）》（1964）、4.《黒人（アメリカン・ニグロ）》（1966）（図版3）、5.《水面》（1968）、6.《フレモント河、ユタ州》（1974）。これらのうち1、4、5は1985年の石川華香展出品作。
- vi フレデリックと妻のエイレーン・ウィテカー HP の経歴記載（2023.1.30 参照）<https://whitakerwatercolors.org/frederic/biography/>
- vii ウィテカーは、1944-47年に、クーパーは1954-58年に会長を務めた。同協会のHPには、特筆すべき元会員として、マリオ・クーパー、クーパーの妻・デイル・マイヤーズ、アンドリュー・ワイエスの名前が記載されている。現在は、アクリル、版画/素描、コラージュ・ミクストメディア、油彩、パステル、彫刻の6分野に分かれている。同協会HP記載（2023.1.30 参照）<https://audubonartists.org/wordpress/>

viii マリオ・クーパーの経歴は、自身による次の書籍に詳しい。Mario Cooper, *The Artist and His Work*, Mario Cooper, *Watercolor by Design*, New-York, Watson-Guptill, 1980

ix 《屋形船・東京湾》(1959年 水彩 メトロポリタン美術館蔵)、《平和記念公園・広島》(1970年 水彩 個人蔵)、《北海道の漁船》(1971年 水彩 個人蔵 アライド・アーティスト・オブ・アメリカ受賞作)(図版4)などを制作した。

x 会期1966年12月8日～1967年1月29日、原題*200 Years of Watercolor Paintings in America, An Exhibition Commemorating the Centennial of the American Watercolor Society*

xi 石川華香『米國百景画集』(日本華香会 和好堂、1974年)。本書刊行の1974年以降、華香の名で展覧会を開催するようになった。

xii 石川の海外取材は1961年のヨーロッパ(欧州15ヶ国を自動車にて)、1963年の東南アジア、1964年の中南米が挙げられる。

xiii 富田の生涯については、橘しづゑ『ボストン美術館 富田幸次郎の五〇年』(彩流社、2022年)に詳しい。同書は富田がボストン美術館に収蔵した作品を対象としているため、石川についての記述はない。

xiv オルソンの作品《あさり掘り》を所蔵するスプリングヴィル美術館HPの作家紹介には“*He was one of 57 living American watercolor artists who were represented in the Metropolitan Museum of Art*”とある。この展覧会は、クーパーや石川の出品した1966年の展覧会を指すと思われる、そのような縁でオルソンは石川作品を収蔵したのかもしれない。同美術館HP(2023. 1. 30参照) <https://webkiosk.springville.org/artist-maker/info/131>

xv 1973年5月16日 東愛知新聞

xvi 1976年9月19日 掲載紙不詳。



図版1：石川新二とマリオ・クーパー
石川華香展図録より転載



図版2：石川新二《こおろぎ》



図版3：石川新二《黒人 (アメリカン・ニグロ)》



図版4：マリオ・クーパー《北海道の漁船》：
Mario Cooper, *Watercolor by Design* より転載